

Jan Ate van Ek :
*Four Complementary
 Structures of Predication
 in Contemporary British
 English : An Inventory*

山川喜久男

著者 J. A. van Ek は、ユトレヒト大学付属の応用言語学部に勤務し、オランダにおける英文法学界の重鎮 R. W. Zandvoort の後継者とみなされる新進の英語学者である。本書は、1966年7月1日グローニンゲン大学に博士号申請論文として提出したものである。副題に「目録」(An Inventory)と断わっているように、現代英語の統語法に関する特殊研究としても、言語分析を理論的に論述することではなく、一応容認される理論の上に立って実地に行なわれた統計的調査の結果を整然と報告することを主旨としている。この慎ましやかな副題は、かえって如実に、著者の言語事実の記述に対する準備工作の周到さと実証的調査の厳正さを伝えている。それは地道で堅実な研究調査の凝縮された成果といえるが、英語の統語法の実態に関心をもつ読者には、従来の文法書や特殊研究の類からは学びえない貴重な知識を、この「目録」から読みとりうる点が少なくない。207ページの小著ではあるが、各種の事項の提示の様式は実に一分のすきのない組織立ったものであり、しかも整然とした形式の底には著者の資料に対する判断とその処理の適正さをうかがわせるに足るものがある。

本書は、つぎの3部からなっている。第1部の「序」(Introduction)は、本書において企てた調査の目的と対象の範囲を述べ、記述の基礎となる諸概念を明確に、そして穩健に、

規定し、採択した資料や参考にした文法書をあげ、その選定の趣旨を明らかにしている。第2部は著者のいわゆる「目録」(Inventory)で、本書の主要部を占め、160ページに及んでいる。第3部は「総括と結び」(Summaries and Conclusions)と題し、第2部で個別的に提示した事項を統合的に比較考察し、問題点の所在を指摘している。

調査の対象となっている「4個の補足的叙述構造」(four complementary structures of predication)とは、I. I let *it* happen./II. I ordered *him* to come./III. I saw *him* coming./IV. I found *him* drowned. の4文の斜字体の部分で、それぞれ例示されるものをいう。いずれも他動詞の補足語(Complement)——伝統文法でいう目的語(Object)——としての機能を果たしながら、意味上でそれぞれ主語と述語とに相当し、叙述(Predication)を構成する2要素からなる。意味上の述語として、Iでは無標不定詞(Unmarked infinitive)——普通にいう原形不定詞(Bare infinitive)——IIでは有標不定詞(Marked infinitive)——普通にいうto付き不定詞(To-infinitive)——IIIではイング(Ing), IVでは過去分詞(Past participle)が、それぞれ用いられる構造である。著者の採用している文法用語は、構造主義的なもので、ほぼ穏健な名称である。ただ、IIIの「イング」については注釈が必要と思われる。それは、実際には伝統文法でいう現在分詞(Present participle)に当たることが多いのであるが、場合によっては、伝統文法でいう動名詞(Gerund)をもさしうる融通性を含んでいる。そのかぎり「イング」は便利な名称にちがいないが、対象となる構造の認定にかかわることもあり、問題を残している。

以上の4個の構造のほかに、それぞれに対する受動態による変形がある。V. *It* was let happen./VI. *He* was ordered to come./VII.

He was seen coming./VIII. *He* was found drowned. の4構造が加わることとなる。都合8種類の叙述構造は、英語の統語法においても基本的でしかも特徴的なものであり、現実に慣用性の強い構造である。また、統語的構造としてその領域と限界を比較的明確に把握しやすいという長所もある。著者が、これを調査の対象に選び、それに基づいて厳密に規定した限界内で徹底的な統計的研究を実施したことは、適切な処置というべきであり、その成果は実証的英語学のひとつの理想的範例を示したものと見える。なお、著者は、IからVIIIまでの文のうち、斜字体で示した構造に他動詞が結合したものを文型(Pattern)と呼び、たとえば“comeに従う構造III”とか“文型IIIに用いられたcome”とか、あるいは簡単に“come III”というような命名法を使用している。以下の紹介でも、適宜この3通りの命名法を用いることにする。

著者は以上8種の構造を導く動詞を現代イギリス英語の各種の文体による26篇の作品および刊行物の中から網羅的に検索し、それぞれの構造を各々の動詞について克明に調査している。このテキストとしての資料の総体を“Corpus”と呼ぶのであるが、それは1950年以降のイギリス英語で書かれたものであり、その内容は約百万語に達する。その内訳は、(1)小説、6篇(30万語)、(2)劇、6篇(10万語)、(3)新聞、4種(25万語)、(4)文学評論および歴史、4篇(20万語)、(5)論説体散文、5篇(15万語)である。このうち、(1)と(2)を創作類(Fiction)(40万語)として α 類と呼び、(3)(4)(5)を非創作類(Non-fiction)(60万語)として β 類と呼んで、この文体上の類別を問題の構造の使用頻度を観察する上の重要な根拠としている。(以下の紹介でも、引用文の末尾にこの α 、 β の類別を付記する。)さらに、引用文には、それが創作からのものにせよ、非創作からのものに

せよ、会話文かまたはその一部をなすものには、とくに s (speech の略) の符号を出典の指示のあとに添付して、文体的配慮の補強に努めている。

このようにきわめて適切に選定した百万語に及ぶ Corpus から検索した動詞は、accustom, acknowledge に始まって watch, wish に至る 157 語であるが、著者はこの Corpus の調査と並行して、従来の標準的で学界でもその価値を認められている英文法書 8 篇 (Poutsma, *A Grammar of Late Modern English*; Curme, *Syntax*; Kruisinga, *A Handbook of Present-Day English*; Jespersen, *A Modern English Grammar*; Kruisinga & Erades, *An English Grammar*; Zandvoort, *A Handbook of English Grammar*; Hornby, *A Guide to Patterns and Usage in English*; Scheurweghs, *Present-Day English Syntax*) を参照し、それらの記述法や引例の不備に注意しながら、文法書の盲点を指摘することも、この研究のひとつの眼目としている。上記の 157 語に関する記事が読者にとってもっとも貴重なものであるが、それ以外に文法書が問題の構造に用いられるとしてとりあげている動詞 134 語 (その中には、18 世紀からの引用文中に現われる語が 7 語ある) が加わって、合わせて 291 語を見出しとする記述が、第 2 部の「目録」を構成している。

さらに、問題の構造の慣用性にかかわる表現の要因として、目的語または主語が人をさす (personal) 語であるか、人以外の事物をさす (non-personal) 語であるか、また I から IV までの文型については、目的語が人をさす再帰代名詞であるか、事物をさす再帰代名詞であるかという点も観察する。

つぎに、本書の主要部をなす内容の一斑を、とくに筆者の注意を引いた若干の事項を記して、紹介してみよう。

(1) help は構造 I と構造 II の両方に用いられるが、Corpus では I が 13 回 (e.g. It became one of my duties to *help* them collect staff. — C. P. Snow, *The New Men* 19 (α)), II が 38 回 (e.g. A way of *helping* the middle income group to obtain housing has been the promotion during recent years of building societies. — *New Nations in Africa* 57 (β)) 見られるが、 $\alpha\beta$ による頻度率の分布は、I が $\alpha:18;\beta:10$ であるのに対し、II が $\alpha:18;\beta:52$ で、II のほうが非創作類にはるかに多く用いられていることがわかる。さらに、Corpus の再分布の頻度率では、help II が論説体散文に用いられる割合がきわだって多くなっている。これによって、help ~ do と help ~ to do との相違は、ある文法家が説くように、アメリカ英語とイギリス英語の差に帰せられるのではなく、口語と文語という文体の差に帰せられるべきであるということが証明される。

(2) I と II の両方の構造に用いられる動詞は、上記 help のほかに、feel, know, leave の 3 語がある。それぞれが両構造を導く頻度数は、feel (I 4 回, II 12 回), know (I 3 回, II 8 回), leave (I 2 回, II 12 回) である。II に用いられる feel は予想外に多いが、I に用いられる feel が肉体的な感覚作用を意味するのに対し、心的な知覚作用を意味する点に特徴がある。それが構造上に反映されて、あとの有標不定詞が to be で表わされる。なお、Corpus に現われる 12 回のうち、7 回まで目的語が始位に立つ、つぎのような表現である。…… there were many besides Yeats who were dissatisfied with *what* they felt to be the imaginative poverty of realism, …… — *The Modern Age* ix. 217 (β). この feel II の特徴のある語順の用例を、文法家であげているのは Jespersen だけである。

know が文型 I に用いられるのは, 'experience' の意味を含む場合であり, Scheurweghs や Poutsma が例示しているように, その意味の know が文型 II に用いられていることがない。E. g. I had never *known* him ask a favour of this kind before.—Snow, *op. cit.* 25 (α). leave I の用例は 2 例とも, *Leave him be.*—W. Hall, *The Long and the Short and the Tall* 56 (α) の形式のものであり, 「きわめて口語的」(“highly colloquial”) な文脈に見られる表現である。

(3) feel や know と並んで, 文型 I に用いられる動詞として, 文法書にあげられるものに find があるが, Corpus にはその例が見出されない。(ただし, 著者は “Note” に最近に発見した find I の例として, *The Observer*, July 18, 1965 からの引用を記している。) もっとも, find II の例も, Corpus にはつぎの 1 例しか見られない。……a place called Barford—which I had not heard of, but *found to be* a village in Warwickshire, ……—Snow, *op. cit.* 19 (α). find の用例として注意すべきなのは文型 III に現われる場合のものであり, 総数 53 回のうち 28 回までが, 目的語として人をさす再帰代名詞が用いられていることである (ほかに, 物をさす再帰代名詞を伴う例が 1 個ある)。E. g. ……we *find ourselves starting* new divisions within the group in rapid succession, ……—*The Observer* (June 30, 1963) 7 (β). このきわ立った慣用的特徴を含む例をあげているのは, 8 篇の文法書のうちで, Krusinga と Scheurweghs だけである。

(4) いわゆる感覚動詞として, see と hear は I と III の両構造ともに高頻度で用いられることの期待される語であるが, Corpus では, see が I (52 回) よりも III (101 回) にはるかに多く用いられ, 逆に hear は III (33

回) よりも I (54 回) に多く用いられている。

(5) have が構造 I とともに 12 回用いられているのに対し, 構造 III とは, それよりもはるかに多く 28 回用いられていることも, 注意を引く。さらに, その have の意味に基づいた分布状態を見ると, I では have が 'experience' を意味する場合は 4 回で全体の 33% にすぎないが, III ではそれが 21 回で全体の 75% にも達している。E. g. I: ……you'd like to stand around in a monkey suit all day *having* soft bloody sailors come up to you and ask where the tie counter is.—H. Livings, *Stop it, Whoever You Are* 135 (α)/III: Thousands of times worse to *have* them *marching* about the streets than *flying* about overhead.—N. Mitford, *Don't Tell Alfred* 133 s (α). また, I と III に共通して, have が 'permit' を意味する場合には, 各例ともみな否定形で現われる。E. g. I'm *not* going to *have* you *timing* me every time I go to the lavatory. —M. Bradbury, *Eating People is Wrong* 135 s (α). have I が助動詞の will, would に伴うことを注意している文法書でも, この点に言及しているものはないことは, やはり文法書の盲点を示している。ここには, 意味と言語形式との相関性ということが考えられるが, 同じ特徴が文型 III に用いられる want の用法にも顕現化していることは興味深い。want III では 4 個の用例がことごとく否定形で現われている。E. g. I *don't want* anybody *moving* round outside. —P. Shaffer, *Five Finger Exercise* 71 (α).

(6) have と get は構造上で対応することが多いが, 文型 IV に用いられる have と get をくらべてみると, have は $\alpha:160; \beta:78$ の分布率で, get は $\alpha:80; \beta:27$ の分布率で用いられており, get のほうがいっそう口語的

な語であることが知られる。さらに、意味上では、have がもっとも多く用いられるのは 'experience' を意味する場合で 39% に当たり、get がもっとも多く用いられるのは 'cause' の意味の場合で 67% を占めている。それだけ get が 'experience,' 'suffer' を意味する場合は特異なものと感じられるが、つぎに Corpus 中の 7 個の用例中のひとつを記す。
 ……didn't I get my eye blacked yesterday for wanting things right? —Hall, *op. cit.* 45 (α).

(7) 文型 II に用いられる動詞の中でも、get, cause, like, set, want, wish は、対応する受動文型の VI に用いられず、逆に VI に用いられながら II に用いられない bind, report, say のような動詞もある。II に用いられる動詞のうち、比較的に高い頻度率で VI に用いられる動詞に、つぎのような判断や認知を表わす動詞がある。suppose (II 11 回, VI 59 回), believe (II 12 回, VI 11 回), know (II 8 回, VI 9 回), think (I 1 回, VI 8 回)。一般に、能動構造が口語的な α 類に多く、受動構造がいっそう形式ばった β 類に多く見られるとは、本書での統計的数を比較してみるまでもなく、容易に推察できることであるが、中には能動文型におけるよりも受動文型に用いられる場合のほうに、α 類からの用例が多いという動詞もある。上記の suppose は II での分布率は α:3;β:5 であるのに対し、VI での分布率は α:98;β:33 である。ほかに、compel (II α:5;β:7/VI α:18;β:10), oblige (II α:0;β:3/VI α:33;β:13) がある。また能動文型 III に対応する受動文型 VII には、catch が see と並んでもっとも多く、ともに 7 回用いられている。E. g. I felt I had been caught out boasting. —L. P. Hartley, *The Go-Between* 72 (α). この catch の III での用例は α 類に 1 個見

られるだけであるのに対し、VII での分布率は α:15;β:2 である。

(8) 構造 V は let とともにしか見られず、しかもその例も、It oughtn't to have been let happen, Eliot. —Snow, *op. cit.* 117 s (α) の 1 例だけである。文法書には let VI が言及され例証もされているが、Corpus には let VI の例は見られない。また、IV に対応する受動文型の VIII には、find (3 回) と leave (2 回) しか用いられていない。E. g. …… the missing child had been found drowned: …… —N. Blake, *The Widow's Cruise* 104 (α)/Tooth decay is caused by food particles left trapped between your teeth. —*Daily Mirror* (July 31, 1963) 6 (β).

著者は、ここに採用したような大きさの Corpus を基にしたのでは、とくに頻度数の少ない項目について、統計的結果の妥当性に限界のあることを認めている。しかしそれはともかくとして、本書に提示された事項は、文法家が往々にして自己の直観に頼り、頻度率が低くても異常な表現に過当な注意を払い、また時間的位相を異にする例を対等に扱って、現実の慣用に対する客観的洞察にこと欠くことがあるという欠陥を浮き彫りにしている。もともと、文法は慣用の実態の客観的記述に避けがたい制約を伴いがちなものであるということも、著者は諒解している。しかし、そうであるからこそ、そういう文法の欠陥を補填するためにも、この種の研究が、対象の範囲を関連する他の構造に推し及ぼして、今後ますます発展され続行されるべきである、という著者の主張は首肯されるのである。

J. A. van Ek: *Four Complementary Structures of Predication in Contemporary British English: An Inventory*, J. B. Wolters, Groningen, 1966.